
のほほん一夏くん

加賀見メグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のほほん一夏くん

【Nコード】

N3802BA

【作者名】

加賀見メグル

【あらすじ】

男性で唯一ISが操縦できる織斑一夏。

世界最強の姉を持つ彼が弱い筈が無い。

だが、一夏は姉とは違いひたすらマイペースにのほほん和我が道を行くぽやんさんだった。

これはのほほんとした少年と少女達が織り成す学園物語である。

あとはほんのりとしたブラコン成分。

第一話

さて、どうしたものか。

まだ幼さが多分に残った相貌をへにゃ、と情けなく歪ませて少年

織斑一夏は考える。

一夏の視線の先。

其処には童顔の女性が眼鏡の奥の目を回して倒れていた。

童顔の女性 山田真耶が纏っているのは、今や世界中で認知さ

れている地上最強の兵器。

インフイニットストラトス

量産型IS『ラファール・リヴァイヴ』はアリーナの壁に激突して、壁を大きくへこませていた。

一夏が身に纏っている量産型IS『打鉄』うちがねから真耶へと続く地面を抉った跡が、二人の間で何が起こったのか如実に表していた。

要は、真耶が何故か焦る。

そのまま一夏日掛けて突っ込む。

一夏が避ける。

勢いそのまま壁へ激突。

今へと到る。

本当にどうしたものか。

眉尻をへにゃ、と落として途方に暮れる一夏は、とある人物へとSOS信号を発信する。

「ちー姉さん、どうしたらいいの?」

『はあ……山田君も困った物だ。そのまま其処で待機している、一夏。すぐにそちらへ行く』

「はい」

一夏が見上げるのはギリシャのコロッセオを近未来的にしたようなアリーナの管制塔。

ISに内蔵されたスピーカー越しに姉の重苦しい溜め息が聞こえた。

程なくて件の声の人物がアリーナのカタパルトデッキに姿を現す。その女性は武者鎧に似た第2世代の国産量産型IS『打鉄』を着ている一夏に似ていた。

一夏のほにや、としたタレ目を（．．．）キリ、とさせて頭一つ分ほど身長を高くした容姿。

漆黒の髪を一本に結わえた後姿。

身体全体から威風堂々と覇者のオーラを醸し出すその戦女神の名は織斑千冬。

一夏の実の姉だった。

千冬は鋭利な眼差しを更に鋭くして眼下で気絶している後輩を見下ろす。

そして。

すう、と大きく肺に空気を取り入れた。

「何をやっている山田君、さっさと起きないか！」

「ひゃ、ひゃいつ！」

芯の通ったその声はアリーナ中に良く響き、気絶していた後輩を叩き起すのに十分な働きをした。

ぴょん、とバネ仕掛けの人形のようにはね起きる真耶。

二人の上下関係が良く分かる構図であった。

一夏と真耶。

二人は千冬が陣取っているカタパルトデッキへとISを操り、帰還する。

片方は至って普通に、片方はどんよりとした影を背負って、と違
いはあるが。

「まったく、これでは何のための入学試験が分からぬではないか」
「は、はい……」

嘆息した千冬に真耶はその童顔に不釣り合いな巨乳に反比例して
小さくなる。

IS学園の入学試験の実技。

やる事は単純だ。

すなわち教員とのISでの模擬戦。

一概に新入生と云ってもその実力は千差万別。

ISに触れたことすらない入学生や、既に国家代表候補生として
数百時間ISを運用している者。

その個々の実力を入学前に図るものとして一夏が受けた模擬戦は
行われているのだ。

故に。

開始して直後に教員の自滅に近い形での模擬戦終了は、入学試験
の趣旨を遂げていない事になる。

その事を当然知っているが故に真耶は千冬の漏らした愚痴が叱責
のように聞こえてしまっていた。

縮こまる真耶を見て千冬は再度嘆息。

まるで、これでは私が虐めているようじゃないか。

傍から見れば十人が十人とも思うであろう感想を心中で吐き捨て
て、千冬は口を開く。

「まあいい、山田君は私の代わりに管制を引き継いでくれ」

「えっとそれでは誰が織斑君の相手を……」

「ふっ、心配しなくてもいい。コイツの相手は私が務めよう」

「え……………ええええええ！ 織斑先生がですか!？」

「不足はあるまい?」

不足どころでなく過剰な提案だった。

織斑千冬。

彼女はISという兵器が台頭する中でまず名前が挙げられない事がないほど有名人物である。

第1回IS世界大会モンド・グロツソ総合優勝および格闘部門優勝者。

つまりISにおいて頂点を極めた女傑が彼女 『ブチュンヒル

デ』こと織斑千冬なのだ。

断じてIS初心者の一夏が相手しても良い人物ではない。

「なあに、まだ尻に殻が付いたひよっ子の相手など造作も無い。それに案外『面白い物』も見れるかもしれんぞ?」

「え? それは一体?」

「お前もそれで良いだろう、一夏」

「お手柔らかにー」

真耶の疑問には答えずISを展開した一夏を仰ぎ見る千冬。話を振られた一夏はほにやり、と人好きする笑みで答えた。

それに対して実の姉はもうすぐ高等学校に上がるうかという弟の幼く無防備な笑顔にやっていけるのであるうかと一抹の不安を覚えていた。

抜けるような快晴の下。

アリーナ上空で対峙する織斑姉弟。

片やぼやん、と柔らかな表情を湛えた弟と、片や伶俐な美貌を携えた硬質な美貌の姉。

見れば見るほどに外見以外では正反対な姉弟であった。

共にISの基本機能であるPICパッシブ・イナージェナル・キャンセラーで重力の鎖から解放され、展開されるISは共に『打鉄』。

「準備は良いか、一夏？」

「準備って云われても、今日初めて操縦するんだから想像するくらいしかやる事がないよ、ちー姉さん」

「十分さ。後、入学したのならば学園内では私の事は先生と呼ぶように、周りに示しが付かんなのでな」

「了解であります。織斑先生！」

元気良く、砕けた調子で敬礼をする弟に、姉はふっと頬を緩ませる。

たった一人の歳が離れた弟なのだ。

『ブリュンヒルデ』と恐れられる彼女も一夏に対してだけは甘い一面を見せる。

「……で、何回だ」

「んと、今丁度70回目」

「ふっ、十分だな。では始めるぞ！」

二人が構えたのを見計らい、管制塔に入る真耶から開始の合図が

成される。

『ではお二人とも、開始して下さい！』

瞬間。

一夏の『打鉄』が消えた。

否、消えたように見えるほど暴力的な加速を伴って移動したのだ。
宙に描かれる鎧武者の黒色の『ジグザグ』な軌跡。
イグニッション・ブースト
瞬時加速。

ISの後部スラスタ翼からエネルギーを放出、その内部に一度取り込み、圧縮して放出するという技能である。

その加速力は凄まじく。

初見であれば容易く懐に食い込まれてしまうであろう。

だが、瞬時加速には幾つかの欠点がある。

それは、使用中は加速に伴う空気抵抗や圧力の関係で軌道を変えることができず、直線的な動きになる点だ。

しかし、一夏は常識を覆すような変態的な機動を行なってみせた。

『い、イグニッションブースト！？ それに多段使用、なんでそんな事が出来るんですかー！？』

官制室の真耶が思わず吠えた。

ISの最高峰モンド・グロツソでもなかなか見る事の無い瞬時加速の『四回連続使用』。

擬音で表すならギユン、ギユ、ギユ、ギユン！ であろうか。

一夏はその加速と機動をもってして人間が構造的に対処しにくい下半身、足の下方より千冬に襲いかかった。

『打鉄』の手甲で覆われた手に持つのはIS専用の刀。
それを無防備な千冬に振りかぶり、

「まずまずと云った所か」

惚けなく同じ刀にて受け止められてしまった。

一夏の手に残ったのは激突の衝撃。

見れば姉は頭と足が天地を逆さまにして対処していた。

ISのPIC 慣性制御だからこそ出来る芸当。

「どうした、これで終わると思ってはいまい？ 何を突っ立っている」

変則的な鏝迫り合いの最中。

千冬は余裕綽々といった様子で一夏に発破を掛ける。

だが、次に開いた一夏の言葉に思わず動揺してしまう。

「ちー姉さん……かつこいい」

「なっ!？」

予想外。

こんな時でさえこのほん、とした弟の贅辞。

憧憬を含んだ一夏の視線に思わず千冬の背筋はムズ痒くなり、顔には朱色が散りばめられる。

確かに今の千冬は異性はおるか同性までも見惚れてしまうような凛々しさがあった。

「……煽っても手は抜かんど、とっとと来い、一夏!」

「うん!」

其処から始まるのは地上最強の兵器ISでの殺陣。

試合場所は上下左右、何ものにもはばれる事の無い空中。

時に剣戟の音をけたたましく打ち鳴らして、

時に瞬時加速を流れるように織り込ませて、
時に二人は螺旋を描きながら上昇して斬り合い、
それは到底世界最強とずぶの素人の戦いではなかった。
そして。
等しく決着は訪れる。

「終わりだな」

「うん、やっぱりちー姉さんは強いね」

「私のシールド残量を五割も削っておきながら良く云う」

一夏の『打鉄』に表示されるシールド残量の数値は0。
それは一夏の敗北を意味していた。

一夏の額に浮かぶのは玉のような汗。
荒い息。

それが二人の戦闘の激しさを物語っていた。

「ほら、立てるか、一夏」

「うん」

アリーナの地面で肩膝を付いた一夏に千冬は手を差し伸べる。

一夏は疲れながらもほにやり、と柔らかく微笑んでその手を握って立ち上がった。

「お疲れ様です。あの……織斑先生は織斑君にISの操縦を教えていたのですか？ 先ほどの操縦はとても初心者之物とは思えませんでした」

二人で連れ添ってカタパルトデッキに戻ってくると、真耶が出迎えた。

そして、労いの言葉と共に疑問を呈した。

対して千冬は苦笑。

ISを待機状態にしている一夏の頭にぼん、と手を置き質問に応える。

「なに、コイツは正真正銘素人だ。それは私が保証しよう」

「でしたら、どうして……」

「見て、覚えて、頭で反芻する。コイツがやっていた事は概ねそんな所だ」

当たり前のように云われ真耶の困惑は更に増す。

それだけ。

たったそれだけで世界最強と渡り合えるわけが無い。

何か云いたげな真耶に、千冬は一夏の頭一つ分低い頭頂部をぐりぐり、と撫でながら補足する。

「一夏、試合が始まってから終わるまで何回ほど私相手にイメージトレーニングをした？」

「んーと、試合前にしたのを除けて数えると63回」

「と、まあそついうわけだ」

「ぼかーん、と口を開けたままで固まる真耶。

数瞬後、我を取り戻した真耶は質問を重ねる。

「あの織斑先生との斬り合いの真つ只中ですか？」
「はい。僕、そういうのは得意なんです。家の料理担当をやっているからかもしれないです」

確かに料理が滞りなく行える人は、腕を動かしながら頭で手順を考える事は出来るだろう。

しかし、刹那の間に勝敗が分かれてしまう勝負事でそれを成すというのは些か無茶が過ぎる。

試合時間は30分足らず。

その間で二桁の仮想試合を行いながら、脳内での結果を自身にフールドバックさせる。

明らかに常人とは逸してる思考形態。

もはや真耶には乾いた笑いしか出てこなかった。

「あはは、やっぱり織斑先生と織斑君はご姉弟なんですね」

「自慢の弟だからな」

「あーうー、ちー姉さん、そういう事はあまり人前で云わないで。恥ずかしい……」

臆面無く言う千冬に、頭を撫で続けられている一夏は恥ずかしがる。

少々ブラコンな気質の姉は弟の講義に取り合わず、かいぐいかいぐり丁度良い高さにある頭を撫で続けていた

F a n f i c t i o n

I S インフィニットストラトス のほほん一夏くん

第一話

「あーうー」

ぺちゃん、と一夏は教室内の自分の席で垂れていた。頬を机につけて突っ伏す形で、心無しか顔も青い。

一夏の周りには女、女、女。

見渡す限り女子しか居ない異常事態。

否。

IS学園はそもそも女子校である。

なぜなら地上最強の平気であるISは『女性にしか使えないのだから』。

故にこの状況下の中で一夏が存在こそが異分子。

だが。

いつもであれば地に足が付いていないようなのほほんとしている

一夏であれば気にはしない。

見世物小屋のパンダと大差ない状況でも、まあいいかで済ませられる心臓の持ち主なのだ。

一夏が弱っているその原因、それは。

「……くさい」

臭いだ。

ぼつり、つぶやかれた一夏の一言に両隣の女子がぴくり、と反応した。

一体何が臭いのか。

年頃の乙女としてはエチケットとして気になるフレーズではある。

意を決した右隣の女性とが垂れている一夏に声を掛ける。

「あの、織斑君だよな？ 史上初男性のIS操縦者ってニュースで流れてた」

「そうだよ」

「私は谷本癒子、よろしくね。それでえつとね、何が臭うのかな？ それに織斑君、なんだか調子悪そうだし……」

話しかけてきたのは明るい色の髪をした二つお下げの女生徒。

周囲の女子がクラスで唯一の男子である一夏に何時話しかけるか、互いに牽制する中での一番手。

水面下での戦いに先手を打ったのは谷本癒子であった。

「その……ね……」

「うん」

慎重に言葉を選んで一夏を促すように癒子が相槌を打つ。

言い淀んでいた一夏は意を決したように言葉を紡いだ。

「色々な香水とかが、ね。単品ならいい匂いなんだろうけど、入り混じっててなんだかこの教室すごく臭くない？ 女の子は気にならないのかな」

その一言。

たった一言で教室内の空気は非常に微妙な、それでいて気まずい物へと変化した。

IS学園に集められた生徒の多種多様。

国籍も様々であり、文化とて様々。

ならば香水の種類や付ける量とて様々だろう。

それらの強烈な個性の匂いが混じり合い、本人達の体臭とも絡み

合い、男である一夏にとって非常に辛い空間へと教室は化学反応していたのだ。

しかもその数、クラスメイト総数30から一夏を引いて29人分。

「あ、あはは……ま、まあその内、織斑君も慣れるんじゃないかな。

………というか今の一言で皆明日から自重すると思っけど………」

「そうかな？ そうだといいなあ………」

聞こえないように呟かれた癒子の最後の言葉は、一夏に届かず。

ぐったり、と元気の無い一夏は、彼女の言葉に縋るように情けない声を出していた。

発育途上の一夏の低身長も相まって、その姿は少ない人数の女生徒達の母性本能を擽っていた。

姉譲りの端正な顔立ちもその一因であろう。

そんな中、一人の人物が行動を起こそうとしていた

その人物は、織斑一夏の幼馴染であり、6年ぶりに一夏と一緒のクラスになった篠ノ之^{しののけ} 篤^{あつ}。

彼女は垂れる幼馴染をなんとかしてやろうと思ひ、窓を見るがI S学院の教室は空調設備完備で窓は日光を取り入れるだけの物で開けない。

空調の換気を良くしようにも空調のボタンは入口の近くにあり篤からかなり遠い。

結局思い立ったが良い物の何も行動に移せないことが分かり、篤は歯噛みをする。

「ぐぬぬ」

元来の仏頂面が更に威圧感を増し、口元がへの字に曲がる。

そんな雰囲気を持つ筈に周囲の人間は引き気味。

篠ノ之さんって怖い人なんだ、と筈の席近くの人間は第一印象を
決定づけてしまったのであった。

あとがき

なんとなく暇つぶしにISSのSSを書いてみた。

最強の姉が居るんだから弟もこれぐらい強いよね、という考えの
下、この作品の一夏は強キャラです。

第二話

「皆さん入学おめでとう御座います、私は副担人の山田真耶です」

童顔で眼鏡で巨乳という多属性を持ち合わせる真耶がそう云いながら教壇に立つ。

彼女が手を掲げると黒板のモニターから『山田真耶』とネームプレートが表示される。

しかし教室内の生徒達から反応は薄い。

皆、一夏の先程の『臭う』発言に少なからずショックを受けている事も要因の一つであった。

微妙な雰囲気教室にもめげず真耶はショートホームルームSHRを進めようとする。

「あ……えつと……今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。」

この学園は全寮制、学校でも放課後でも一緒です。仲良く助け合っ
つて楽しい3年間にしましょうね」

ネームプレートを表示していたモニターが切り替わり、IS学園の各設備を映し出す。

しかし。

やはり女生徒達からの反応は薄い。

更に云えば教壇の前を鎮座する『唯一の男性IS操縦者』である一夏はどことなく不調具合が見受けられる。

何と云うか、これから新しい学園生活を始める新入生特有の生き生きとした活気が感じられなかった。

「じゃ、じゃあ、初めて同士の人が大半でしょうし、親睦を深める意味合いを込めて自己紹介をしましょうか。」

名前と出来れば簡単な趣味や特技を云って貰えると嬉しいですよ」

起死回生とばかりに真耶が好手を繰り出した。
これならば全員の紹介が終わるまでに少なくとも時間稼ぎが出来る。

あわよくばクラスの雰囲気も良くなって欲しいという願望も若干ながら籠っている。

一夏はそんな新米教師の様子を、ぼんやりと特等席で眺めていた。真耶の目論見通り自己紹介を進めていく中で微妙な雰囲気は払拭されていた。

一夏の苗字は織斑で『お』。

比較的早い段階で彼の順番が回ってきた。

動物園のパンダ並みに注目度の高い一夏だ。

それ相応に女子達の期待は高まって、視線が物理的な圧力をもつたかのように四方八方から一夏に突き刺さる。

「織斑一夏です。特技と云えるほどの物では有りませんが家事全般が得意です。

もう既に知っている人の方が多いと思いますが、男性で唯一ISを操縦できるみたいなのでこの学園に入学する事になりました。

IS操縦に関しては殆ど素人なので皆さんと一緒に学んでいけたら嬉しいです。

……………後、余り臭いのきつい物は少し苦手です」

注目を浴びた一夏がしたのは突飛でもなく、無難で模範解答のよくな自己紹介だった。

ただ控えめに付け加えられた苦手な物の所で、大半の女生徒が明日からは香水を控え目にしようと思っようになった。

そして。

一夏の自己紹介が終わった所で教室の扉が開いた。

颯爽と入室してきたのは、スーツをきっちりと着こなした一夏の

実の姉　織斑千冬。

「あれだけ動いて置きながら良く言う。まあ間違いでは無いのだがな」

「あ……ちー姉、織斑先生」

ちー姉さん、と何時もの癖で出て来てしまいそうだった呼称を、千冬に軽く睨まれたことで云い噤み、言い直す一夏。

訂正した弟に満足気に一つ頷くと千冬は真耶からSHRの進行を引き継ぐ。

「すまない、遅れた。ご苦勞だったな、山田君」

「あ、織斑先生。会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けて済まなかったな」

じろり、とクラス全体を睥睨する千冬の鋭い視線に、生徒の背筋が自然と真っ直ぐになる。

理由は織斑千冬の放つ硬質な威圧感と、『ブリュンヒルデ』のネームバリューだろう。

一瞬にして生徒達の視線を釘付けにした千冬は喋り始める。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。」

出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが私の言う事は聞けないな」

淡々と述べていく千冬に生徒達は真剣に聞き入る。

下手な男より男らしい一夏の自慢の姉だ。

中には、というより殆どの女子が憧憬の眼差して教壇に立つ千冬

を見ていた。

それはさながら戦女神を信奉する信者のように。

そして。

爆発した。

示し合わせたかのように響き渡るのは乙女の黄色い歓声。

『きゃああああああああつ！！！！！！』

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！！」

たまらないのは何の前準備も出来ていなかった一夏だ。

甲高い大声量が鼓膜に直撃する。

「……………のおううー」

香水と体臭が見事にミックスした臭いで既にグロッキー状態だった彼に、追い打ちとばかりに怪音波の聴覚への攻撃。

(´・`・´)(こつだった一夏が)；；；(こつなるくらい)の死体蹴りである。

これからこの学園でやっていけるのか、一抹以上の不安が一夏に過ぎる。

「……………毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスだけに馬鹿者を集中させているのか？」

一方で千冬は、この状況には既に慣れているのか呆れが濃く出た嘆息で狂乱と化したクラスを見ていた。

その淡白な反応が良いのか、女子達は更に加熱していく。

「きゃあああつ！ お姉様 もつと叱って！！ 罵って！！」

「でも、時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をしてー！」

「弾……女子校は怖い所だったよー。とても弾が云ってたような羨ましい場所じゃ無いよう（、；、；、）」

心底参った様子で一夏は机に突っ伏してしまった。

教師の前で流石に行儀が悪いとは思ったが、それ以上に心身に押し掛ける疲労が濃い。

女子校に入学が出来るなんてパラダイスじゃねえか、と云っていた親友の五反田^{ごたんだ} 弾^{だん}に文句の一つでも云いたくなる。

山田先生はそんな一夏にオロオロ。

「で、其処の生徒はどうした？ 顔色が悪いようだが」

「ちょっと気分が優れません」

一夏の顔色の悪さを見咎めた千冬は尋ねる。

それに対し一夏は素直に応える事で不調を伝えた。

確かに顔は血の気が若干失せており、青白い。

「ふむ、そうか。体調管理は各々でしっかりしておけと云いたい所だが、そんな調子のお前に云った所で十分に伝わるまい。

………仕方ない、山田君。済まないがコイツを保健室で休ませてやってくれ」

「あ、はい分かりました」

決断するまでの幾許の間が空いたのは自分が介抱するか否かを天秤に掛けた為だ。

クラスの挨拶を任せてしまったのに、更に担任の仕事を真耶に押し

し付ける訳にもいかない。

千冬は心中で渋々、泣く泣く愛する弟の看護を断念した。後ろ髪を引かれる思いが真耶と連れ立って教室を退出していく弟の後ろ姿を見えなくなるまで見送る。

否。

扉が締まっただけから暫く見ているほどであった。

「ねえ、織斑君ってあの千冬様の弟？」

「それじゃ、世界で唯一ISを使えるっていうのもそれが関係しているのかな？」

声量を抑えたヒソヒソ話が伝播する。

話題は一夏と千冬の関係について。

しかし。

その無駄話は千冬の厳しい声によって断絶させられる。

「静かに！」

内緒話をしていた女子達の肩が一斉に跳ねた。

発せられた声にながら千冬の怒気を感じたからだ。

教壇を陣取る千冬の眼光は心無しか剣呑な色合いを帯びている。

「さあ、シオートホームルームは終わりだ。諸君らにはこれからI Sの基礎知識を半月で覚えてもらう。

その後実習だが、基本動作は半月で身体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ！！」

それが姉弟での初めての授業が思わぬ理由で断念せざるを得なかった八つ当たりでは無い筈だ。

恐らく

F a n f i c t i o n

I S インフィニットストラトス のほほん一夏くん

第二話

「大丈夫ですか、織斑君。少し横になっていて下さいね」

「有難うございます、山田先生」

「でもどうしたんですか？ ちょっと失礼しますね……………熱も無いみたいですし、何か調子が悪くなるような心当たりはありませんか？」

真耶の掌が保健室のベッドに寝かされた一夏の額に添えられる。ひんやりとした女性の掌の感触に一夏は気持ちよさそうに目を細めた。

「ちよつと教室の籠った臭いがきつくて……………」

「ああ」

齎された回答に合点がいった真耶は大きく頷く。

「確かにこの時期は心機一転して学園デビューしようとする子も多いですから、お化粧何かに気合が入りすぎちゃっ子も多いんですよ。」

だから落ち着いてくれば自分に見合った香水の量とかも分かってくる。きて臭いの方も然程気にならなくなると思いますよ。

それに、もし辛いようでした私に行ってください。空調の換気を強めにしますから」

「はい」

魔境と化した教室から退避できた一夏の顔色は徐々に良くなっていった。

青白かった顔は血の気が戻り、血色が良い。

体調の方も随分楽になっていたのでこのまま授業に参加しても大丈夫な位だ。

しかし。

「でもちよつと今教室に戻るのには勇気が要りますね」

苦手意識が出来上がっている一夏には、1年1組の教室がラフレシアの群生地のように思っていた。

「あ、あはは……そ、そうだ織斑君は予習はしてきましたか？ 入学前にお家の方に参考書が送られてきたと思うんですが」

「バッチリです。結構自身があります（*・・*）むふー」

ベッドから上半身を起こした一夏が真耶の質問に胸を張って答える。

よつぽど自身があるのか、偉いでしょう？ と云わんばかりの子供じみた態度に真耶は知らずくすり、と笑みが溢れた。

顔立ちはほぼ一緒。

しかし一夏が（*・・*）ポヤーンだとすれば千冬が（・・・）キリ

そのギャップの激しさが真耶の笑いのツボに刺激していた。

ポニーテールにした和風の少女だった。
そして。

その大和撫子的な相貌の少女に一夏は見覚えがあった。

「箒ちゃん、久しぶりだね」

「い、一夏！？ お前、私の事を覚えていてくれたのか！？」

名前を呼ばれた事で少女 篠ノ之箒は目に見えて狼狽を露にする。

動揺する箒に対して一夏は何を当たり前な、といった表情。

「幼馴染の顔くらい覚えていよー。でも見間違えた。箒ちゃん凄く綺麗になったね……後、身長も」

「う、あ……あ……ありがとう」

齒に衣着せない褒め言葉。

箒は直球の賛辞に慣れていない様子で俯いて小さく礼を云う。

低身長のコンプレックスから出た一夏の最後の言葉は華麗にスル
ーだ。

「その、体は大丈夫か？ 教室を出て行った時は随分辛そうだったが」

「今は平気だよ。ちょっとあの教室の中の空気にクラクラしただけだから」

「なっ！？ 一夏破廉恥だぞ！」

「え？」

「ん？」

何故か相互の認識が食い違った。

首を傾げる一夏に箒もはた、と彼の様子に気がついた。

コントのような遣り取りを繰り広げる幼馴染達に真耶が補足を入れる。

「篠ノ之さん、織斑君は香水の臭いが苦手だったみたいなので、それで体調が悪くなったんですよ」

「そ、そういえばそうだったな。す、すまんつい早とちりをしてしまった」

非を認めて謝る筈に、いいいいいよ、と一夏は軽く水に流す。

「しかし、良く一目で私だと分かったな。私も人の事を云えないが6年だぞ。一夏も大分……少しは変わったしな」

「箒ちゃん、それは僕の身長があまり伸びてないと暗に行っているのかな？」

幼馴染の不自然な言い直しに、一夏はじとー、ねめつける。

慌てたのは箒だ。

「ち、違つぞ！ そうでは無くてだな、人相とかそういうものが変わっているかと思っていたのだが、一夏が一夏のみまで成長しているという意味だ」

「まあ、そういう事なら。僕の方は一応束姉さんに箒ちゃんの写真とかも見せて貰っていたからね、すぐ分かった」

「何？」

何気ない一言に箒の声色が1オクターブほど下がる。

それは彼女にとって地雷をストンピングで踏み抜く行為であった。

篠ノ之箒の姉である篠ノ之束はISの産みの母。

最強平気であるISを若くして発明して真正正銘の大天才である。しかしそれ故に周囲の人間に与える影響も大きかった。

ISは文字通り世界を変えた。

既存の兵器たちはISの誕生により後を追いついてられるように衰退していき、後釜をISに譲らざるを得なかった。

アラスカ条約でISの軍事利用は禁止されているとはいえ、それはあくまでの建前に過ぎない。

其処に最強があるのだ。

各国の首脳部の人間からすれば喉から手が出る宝物。

それ故にIS開発者の篠ノ之束の占めるウエイトは重い。重すぎる。

それはその家族にも言えることだ。

そのせいで箒は小学4年生の時から政府の重要人物保護プログラムにより日本各地を転々とさせられていた。

篠ノ之箒は織斑一夏に幼い頃から淡い恋心を抱いている。

その好いた幼馴染と無理やり引き離されたのだ。

実の姉というえ好きになれる筈が無い。

憎んでいるとも云えた。

「どづい事だ」

鋭くなる眼差し。

低くなる声色。

箒が無理矢理にでも問いたださそうとした瞬間。

キーンコーンカーンコーン、と二限目の始まりを告げる予鈴が鳴った。

「篠ノ之さん、積もる話もあると思いますがそれは後で。授業が始まってしまいますよ」

「む」

「織斑君も体調がよければ次の授業から出席できますか？」

「あ、はい」

教師として顔を見せた真耶に止められ、箒は渋々追求の矛を収めた。

しかし、その眼は後できっちり話して貰うからな、と一夏を視線で射抜いていた。

それを受けた一夏はお手柔らかに、とほにやり、と笑っただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3802ba/>

のほほん一夏くん

2012年1月11日05時54分発行